

アトリエ 琉游舎 だより 217号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2025年11月5日発行

紅の八塩に染めておこせたる (くれないの) (八入) 衣の裾も通りて濡れぬ

○万葉集所収の和歌です。布を染める際に染料に一度浸すことを「一入（ひとしお）」と呼び、何度も浸すことを八塩（八入・やしお）と言います。「八」は「多く」、「入」は染料に浸すことを意味するとのこと。深みのある紅花色は貴族たちの憧れであり、何度も染め重ねで得られる濃厚な色彩は高貴さの象徴だったようです。

○和歌の意味は「紅の八塩に染めて仕立てた衣の裾が、通り雨に濡れてしまった」という情景を詠んだものでしょう。丹念に染め上げられた紅の衣と、自然の雨が交差する瞬間の情景の中に、紅に染められた衣の鮮やかさと美しさが際立って見えてきます。

○「八入の雨（やしおのあめ）」という言葉があります。ちょうど今頃、もみじの葉が色づき始め一雨ごとに鮮やかな紅葉色に染まっていく頃に降る雨のことです。一入（ひとしお）ごとに鮮やかな色に染められていく衣のように、一雨ごとに木の葉が色濃く染まっていく雨を「八入の雨」と呼ぶのです。「八入の雨」は自然の移ろいを染色の技法に喩えることで、季節の深まりと人の営みの交差を表現した、美しい日本語が醸し出す美しい日本の姿です。

○言葉はその意味の多重性や音韻、形象などが想像力を刺激し、単なる意味の伝達から、映像や思想、感情までも伝える力があるのです。美しい言葉だけが持つ力です。それは自然の移ろい、激しさ、優しさをも包摂して人が自然そのものであることを教えてくれるのです。この和歌からだけでも、言葉が自然と人の営みの間を結ぶ紐帯であることがよく分ります。

○美しい言葉を心と体で体現できる人が美しい日本人です。その美しい日本人が住む国が美しい日本です。この美しい国を愛おしむ人が美しい日本人です。私は強い日本や、世界の真ん中で咲き誇る日本を望もうとは思いません。強い日本と引き替えに、美しい日本語が持つ自然や他者との共棲の感覚が、一入ごとの雨に濡れそぼって、八入の雨の頃にはすっかり脱色された衣の裾になっていなければよいのですが。

11月・12月スケジュール

			木	金	土	日
			6	7	8	9
火 水						
10	11 読書会 13時半から	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25 読書会 13時半から	26	27	28	29	30
12月1日	2	3	4	5	6	7 写経会 13時半から

読書会

11月11日（日）

11月25日（日）

13時半から

写経会

12月7日（日）

13時半から

狂言綺語…信頼と信行

やっと秋らしくなってきました。今年もいつも通り木々の葉っぱが色づき、雑草は枯れ始め、柿や栗が実り、虫の音に秋の夜長を感じるようになりました。一雨ごとに気温が下がっていく毎日を体感すると、ついこの間までは、このまま日本は亜熱帯気候となって、四季もなくなり乾季と雨季だけになってしまうのではないかと、秋や冬の到来を疑っていたこともすっかり忘れ、衣替えを急ぎ、こたつ布団を引っ張り出しで、秋の深まりに備えています。山もそろそろ雪が降り始めることでしょう。ただ今年は暑さが長引いたため、畑を準備する気力が失せて、八月の終わりに蒔かなければならない大根などの秋冬野菜は、全く手当ができないまま10月になってしまいました。やっと草刈りができる気候になったので、牧草状態の畑の草を刈り、耕して、やっと冬越し野菜の玉葱やサヤエンドウの作付け準備が始まったところです。秋が来ると信じて、信じ切れない毎日が続いた結果の、いつもと違う秋の畑、自然への信頼が少し揺らいだ今年の秋でした。

私たちの日々は、明日も今日と同じような日が来ると信じていることができることによって、初めて今日の安心を得ることができるのではないのでしょうか。今日の安心を信じ、頼りにすることで、安心の明日が迎えらることを信じていることができるのです、これを「信頼」と呼びます。信頼は、今知りうる相手側の意思や能力、人格などに対し、将来的な安心感や確信を持ち、信じて頼りにすることです。それによって相手側が期待通りの結果をもたらすだろうということを期待するのです。もし期待通りの結果が得られなかったら、信頼が裏切られたこととなります。それは精神的な痛手ばかりでなく、経済的、物理的な損失ももたらすことになるでしょう。最近「首脳同士の個人的信頼関係を作る」という言葉を頻繁に耳にします。互いの国のトップ同士に個人的な信頼関係があれば、互いの国も信頼関係にあるという「個人＝国」の文脈で語られる言葉です。他国との折衝が国益のためであれば、本来相反するはずの国益を調整して、互いの利益が五分五分と思える程度の結論に導くことが、外交折衝のはずです。ところがその前提が、個人同士の信頼関係ならば、国益を首脳同士の個人の感情や人格や能力に全面的に委任してしまうことにはならないのでしょうか。少なくとも個人的な信頼関係を作りたいと思っている当の両首脳の意志や人格に関しては、私は到底信頼できるものではありません。互いの首脳も信頼は国益を自国に有利に導くための手段だと思っているのでしょうか。

信頼が目的のための手段だとすれば、信頼することもされることも互いの信頼関係を利用した化かし合いの陥穽に落ちてしまうはずで。それは、私たちが「信」に「頼る」あるいは、「頼られる」ことで何らかの果実を望むことが目的となってしまうからでしょう。何らかの見返りを望むからこそ信じるという構造です。その結果頼りにする対象を信じるのではなく、その対象がもたらす結果を信じるという本末転倒が起こるのです。「信」に「頼る」ことは互いが依存し合う仲です。社会生活の中では化かし合いの陥穽におちいる可能性があるろうとも、たとえそこに主従関係や上下関係が生まれようとも、互いのコミュニケーションの手段として有効に機能する限り、社会の仕組みとして容認できることとして、それで良しとなるはずで。

ところで「信頼」に互いが頼る依存関係が宗教の世界で機能するとき、信頼は経済論理に還元されてしまうことがあります。宗教活動が資本も設備投資も必要としない、新手のビジネスと思えるような活動をしている宗教教団が多いと感じるのは私だけではないはずで。布施と称して教団に財産を上納する人達は、何を信じ、何を頼り、何の果実を期待しているのか、そして頼られた教団は何を果実として与えているのか、しかしそれを第三者だけでなく、信仰の埒外の親子が知ることができなくても問題はありません。信仰の本質は、信じるものと信じられるものとの一対一の関係性にある、と考えれば当事者同士が分っていればよいことです。互いがそれで安楽を得られていると思えば、それが信仰だからです。寡聞にして仏教以外の宗教が信頼関係を教義の基盤としているかどうかは知りません。ただ私は「信頼」を基盤にした宗教は、例外なく頼るものが何らかの果実を期待すると言う構造にならざるを得ないと考えます。それは宗教でしょうか。

お釈迦さまへの「信」は、私たちが安らぎの処へと導くための「信」です。何らかの「果」を期待するための「信」ではありません。なぜなら、安らぎの処への道のりは自己のはからいでも他者のはからいの結果でもなく、ありのままの歩みが導く「果」だからです。諸行無常、縁起の法則の「果」なのです。だから仏教には互いの信頼関係という打算的な言葉は存在しません。あるのは「信」と「信」への無私（諸法無我）の帰依だけです。「信」は対象（神や仏）に頼ることを望むのではなく「信」によってその「信」が私自身に安楽をもたらすことを信じて、「信」の指し示すところに向かって歩み始めるためにあるのです。そしてその歩みが「行」です。私はお釈迦さまを信頼したことは一度もありません。自ら歩み始めない限り、頼ったところで何も与えてくれないからです。お釈迦さまの「法（教え）」が照らす（法灯明）道を自らの足（自灯明）で歩き続けければ、必ず安らぎの処へ辿り着くことができることを信じていることが私の「信」です。それがお釈迦さまへの帰依です。「信」が「行」となったとき、それは自ずから「果」となるのです。

「信頼」は社会生活では必要な基盤ですが、それは娑婆だけに通用する概念です。信仰の世界では「信頼」すべき対象は存在しません。あるのは各々の「信行」だけです。娑婆では神様仏様を拝んで、何らかのご利益を望むことが宗教とされていますが、現実には神仏は具体的な御利益を与えてくれることはありません。それがあると主張する方に私は「それは幻想です。」と申し上げます。信仰の世界では「信行」だけが大きいもの（神仏）との対話を可能にしてくれるのです。それが信仰です。御利益を頼りに神仏をただ拝んでも布施に励んでも、それは口をポカンと開けて永遠に入らない御利益を待つことにしか過ぎないのです。